【ねがいましては】

平成２２年４月２３日　　*KYOWA SCHOOL*
第２３４号

「・・・してくれない」

この表題、責任転嫁している言葉だと感じてしまいます。学校での勉強は「してくれる」内容のものが多いと思います。基礎や基本は自発的行動を伴うことが少ないのでしかたないといえます。しつけなどもその一つでしょう。箸の持ち方やあいさつ、歯磨き手洗い・・・これは親が教える基本かもしれません。

そこに味付けエッセンス、もうワンステップ。

私はこう思います。一緒にやればいい・・・教えるというよりも、いっしょに学ぶ。すると子の心は徐々に前を向いてきます。次のいっしょをいっしょに学びたい。どんどん前を向き始めます。そして自分ひとりで取り組み始めたらヒントを与えます。あくまでも「・・・しなさい」（命令）は、なし。

命令は子にとって嫌がられると同時に、命令されるほうが楽な場合もあります。自分を自分で分析する必要もなし。自分を自分で計画する必要もなし。しかしそれでは、自己を見つめることから逃避し、自分の行動が他に対しどのような影響を与えているかなど、社会人として必要な全体像把握のトレーニングができません。危険なのが責任転嫁です。あの人の言うとおりにやっただけ、だから今回の失態については自分の責任ではない・・・。

その産物として他人を思う心「おもいやり」が育たないことになります。

子との接し方にあたり、「だって・・・してくれないんだもん。」という発言があったとしたら、ここはしっかり子に対し、それがいかにマイナスな考え方なのか説明する必要があると思います。

自分の行動はすべて自分に責任がある。このことを幼少のときから説く必要があると思います。たとえそれが命令であっても・・・。そこから自己に対し慎重さが現れ、言動に「人らしさ」がプラスされます。

自発的行動が削除されがちな場があります。学校です。エスカレーター的授業に黙って乗っていればそれですみます。担任の先生は、やがていくら指しても発言しない子を指さなくなったりします。が、現場は大変だと思います。先生方は日々ご苦労されています。

失敗しても自発性を優先するトレーニング（ここでは、やたらやかましく言います。）によって、やがてやってくる進学などについても自然体で考えるようになるかもしれません。しかしそれとは真っ向正反対の現場があります。進学塾などのカリキュラム設定型の現場です。テストをする、結果から講師陣がどの分野をどのくらいやるかを計画、宿題などの形でトレーニングさせる。まるでスポーツジムのインストラクターです。スポーツ的に考えれば上達するでしょう。そして『成績アップ』という最もほしかったお土産を手に入れることになります。ただしこれはスポーツの世界での一つの成功であり、長い人生を考えた場合、けっして自立を手にしたとは言い難いと思います。

「やれと言われたからやったんだ・・・。」この子はこころの成長を手に入れたのでしょうか。

私はなるべく「・・・しなさい。」とは言わないようにしています。まず自分でどう動くかを考え出してみよう・・・。

英語が苦手な子がいたとしたら、間違いなくその子は英語が大嫌いです。当たり前、その子が一大決心し、「英語やります。」と言えた瞬間が最もほめてあげなければならない瞬間でありますし、その後の歩き方もかなり緩やかなものであることは間違いありませんから、そこをじっくり寄り添ってあげることが大切です。このことはご家族の皆さんにも協力していただかなければならないことです。それが裏切られることがあります。「あなたあれだけやってたのに、まったく成果が出てないじゃない。」などの興ざめしてしまう言葉です。

本人が望む一番の評価は、いやなものに立ち向かい続けたその行為そのものを褒めてもらうことです。

中学３年生の子が中学１年生にまでさかのぼり取り戻そうとしたら、かなりな時間を必要とします。半年かかっても１年生が終了するかどうかでしょう。もちろん取り組む時間にもよりますが。（学校行かないで、ここで朝からやればかなり短時間でと思う子は多いです。）

それでは学校の定期テストに反映されることは難しくなります。定期テストはあくまでもその学年の範囲。

それより何より、私が彼らに伝えたいことは、「『学ぶ』を楽しもう」です。

ご家族の方々へのお願いはただただひとつ、その子の「取り組んだ」という「勇気」に対しての評価です。

お母さま方に、「どうかお子さんと一緒に英語を勉強なさってください。」と、お願いしたら、どれだけの方がなさるでしょう。お母さまにも勇気が必要です。まして中学時代同じように英語が大の苦手だとしたら・・・。

その部分に照準を合わせて褒めてあげること、すると不思議に表情が変化しはじめます。表情が穏やかになります。素直な表情になります。心のケアも一緒にできていたことになります。

もしお子さんが「・・・してくれない。」と言われるようであれば、それは私にとってとても悲しいことなのです。

小学校中学年以下にとっては、自発的な学びを感じさせる行動は難しいと思います。「先生やることありません。」

「先生、なにやればいいですか。」は、当たり前と思ってください。まして毎日学校へ行っているわけですから・・・。

集団による対面一斉授業が、子どもたちから「前向き」を生み出すよりも、逆に「前向きの芽」を奪ってしまっているような気がいたします。負ける練習、失敗する練習ですね。